

怪談物件マヨイガ

蒼月海里

第二回

呪いの仕組み

店の帳簿は、今月も赤字であることを示していた。

既にかんりの借金をしており、これ以上やりくりするのは難しい。店を閉めて、破産手続きをしてしまおうかという考えが過ぎる。

「いや、もう少し頑張ってみよう。今は機運きうんが悪いだけだ。もう少しすれば、ちゃんと利益が出る。そして、妻や娘にも苦勞をかけずに済むようになるから——」

もう少しとは、どれくらいだろうか。先月も、そう言うてはなかっただろうか。

家計は、フルタイムでパートをしている妻頼みになっている。娘はこちらを心配して、将来は店を手伝おうかという始末だ。だが、娘には親に縛られず、自分が好きな道を歩んで欲しい。

「どうすればいいんだ……?」

このまま、出口が見えないトンネルの中でもがき続けるべきか。だが、これ以上無理な経営をしては、家族に迷惑をかけてしまう。すでに、充分過ぎるほどかけているのに。

「……生命保険、俺が死んだらいくら出るんだ？」

ふと、保険金のことか頭を過ぎった。事故に見せかけて自殺すれば、家族にこれ以上迷惑をかけず、かつ、大金が手に入る。

コンコン、とノックの音がする。

閉店した後の店内に、それはよく響いていた。

「なんだ……？」

コンコン、とこちらを呼ぶような音は、シャッターが閉まった外からではなく、足元からした。

机の下をよく見ると、そこには床下収納があった。

「こんなところに、収納があったなんて……」

机はなぜか備え付けだったため、気付かなかったのだ。

ノックはその収納から聞こえる。一体、何者の仕業なのだろう。

ネズミにしては、ずいぶんと大きな音ではないか。

好奇心から手を伸ばす。いや、むしろ、藁わらをも掴みかかったのかもしれない。

たとえそれが、藁ではなくても――。

うえの上野の貸店舗の入居者と連絡が取れない。

さかき榊の隣のデスクで、かしはむき柏崎は苦虫を噛み潰したような顔でそう言った。

「えっ、なんか事件ですか？」

積まれたタスクをようやく終えた榊は、ちびちびとインスタントコーヒーを飲みながら目を丸くする。

「わからん。だから、確認に行く。こういうのは二人がいいからな。お前も来い」

「ハイ！」

榊はコーヒーをグイッと飲み干すと、背筋を伸ばしながら立ち上がった。

「賃料は振り込みだったんだ。だが、期日になっても振り込みがなくてな。電話で確認しようとしたんだが、応答がなかった」

「逃げているのでは……」

榊は遠慮がちに言った。

「可能性がないわけじゃない。資金繰りに苦勞くろうしていたと聞いている。まあ、逃げているくらいならば、取っ捕まえればいいんだが……」

柏崎は言葉を濁す。榊は、息を呑んだ。

「まあ、なんにせよ、最悪の事態は想定した方がいい。榊、格闘技の経験は？」

「イエ、ないです。部活もずっと文化部でした」

なぜ格闘技が必要なのか、と榊は首を傾げる。

「そうか。過去に一度、精神的に追い詰められた入居者もんぢやくと悶着もんぢやくになったことがあってな」

「ひえっ……」

「私は君を守るほど器用じゃないから、自分の身は自分で守ってくれ」

「むしろ、柏崎さんを守りたいところですが……!」

榊はきりっと表情を引き締める。

だが、柏崎の反応は冷めたものだった。

「私は入居者の身柄の確保に専念するから不要だ。攻撃は最大の防御だしな」

「僕の上司が勇ましすぎる件……」

柏崎は、いつものローヒールから動き易いローファーに履き替えて、ホワイトボードに行き先を書き、榊を引きつれて颯爽さつそうとオフィスを後にしたのであった。

4

市ヶ谷いちがや駅から上野駅へは、総武線で秋葉原あきはばら駅まで行き、山手線か京浜東北線に乗り換えてすぐである。

大規模なターミナル駅で、JRのみならず、メトロや新幹線なども通っている。駅構内は、大きなキャリーケースを引きずって歩く旅行者で溢れていた。

駅から出ると、灰色の暗雲が頭上で渦巻いているのに気づいた。一雨来る前に終わらせたいな、と柏崎はぼやいた。

上野から御徒町おちまちにかけて、アメ横商店街がある。戦後は闇市だっ

たらしいが、今は活気が溢れる商店街だ。

「おお……。アメ横なんて初めて来た……」

年末の大賑わいをテレビで見ただけの榊は、アメ横商店街に立ち並ぶ数多の店を眺めながら感動していた。

「ああ。君は初めてか」

「はい！」

「だが、観光は後でな」

「はい……」

今は、連絡が途絶えた入居者の搜索が優先だということは、榊も肝に銘じていた。大事にならずに済み、帰りに多少の観光を楽しめることを祈りつつ、柏崎に続く。

商店街から少し外れた路地を往くと、驚くほど静かだった。

商店街では人を避けながら歩いていたのに、路地は地元民おほと思しき人がぼつぼつと歩いているくらいだ。

少し寂しくなった路地をしばらく行ったところで、柏崎は立ち止まった。

「ここだ」

建物と建物の隙間に、ひっそりと建っている店舗だった。シャツターは、固く閉ざされている。

「人の気配、ないですね……」

「そうだな……」

やはり、夜逃げでもしたのだろうか、と榊は思う。そんな中、柏崎は裏手に回って入り口を見つけ、インターホンを鳴らしてみた。やはり、反応はない。ノックをして呼びかけてみるが、同じだった。

「行くぞ」

「はい……」

柏崎は会社で管理している鍵を突っ込み、扉を開け放つ。

「失礼！ マヨイガの柏崎です。落合さんおちあい、いらっしゃいますか？」
落合とは、入居者の名前である。この物件で店を営み、店長をしていたという。

柏崎のハスキーボイスが、真っ暗な店内に響き渡る。榊もまた、押し入る柏崎とともに店内へと入るが、その瞬間、異様な臭いが鼻を衝いた。

「うぐっ……」

柏崎と榊は、鼻と口を覆う。

榊は手探りでスイッチを発見し、照明をつけた。
すると、辺りがパッと照らされる。クリーム色の壁は、建物が古いためか、少し黄ばんでいた。

「なっ……」

途端に、落合を探していた柏崎が声をあげる。

「どうしました？」

「榊、こっちに来るな！」

そう言われても、声をあげた柏崎を放っておけない。

どうやら輸入雑貨店を経営していたらしく、店内には派手な色の雑貨がずらりと並び、外国から来たと思しき段ボール箱が積み上げられている。

段ボール箱の山をかき分け、勇気を振り絞って駆けつけた榊が見たものは、オフィス用の机の下で仰向けになっている中年男性だった。

ただし、その下半身はなかった。

その男性はまるで無造作に置かれた胸像のように、目を見開いたまま天井を仰いで絶命していたのであった。

それから、柏崎は警察を呼び、榊とともに事情聴取を受けた。

亡くなっていた中年男性は、やはり自分達が探していた落合だった。資金繰りが厳しいというのは、机の上にあった帳簿から読み取れた。

と言っても、帳簿を冷静に見ていたのは柏崎だったのだが。榊は衝撃的な遺体を前に、思わず戻ってしまったのである。

「結局、下半身は見つからなかったみたいですね……」

警察署を後にした榊は、柏崎とタクシーに乗って自宅へと向かっていた。外はすっかり暗くなり、車窓の風景はネオンで彩られてい

る。

「そうだな。消えたということはないだろうが、持ち去られたというのも妙なな」

現場には奇妙な点が他にもあった。

机の下には、隠されるように床下収納が存在していた。だが、扉は開け放たれたままで、中は空っぽだった。

「そこに財産を隠していて、強盗に襲われたとか……」

「それならば、資金繰りも何とかなっていただろうし、現場はもつと凄惨せいさんだろう。あそこには、争った痕はなかった」

柏崎のツツコミに、「そうですね」としか答えられなかった。

目を閉じたくない。瞼まぶたの裏に、絶命した落合の顔が浮かんでくるからだ。

夢見はきつと、悪いだろう。成仏してくださいと心の中で祈るものの、とてもではないが、成仏出来そうな状況ではなかった。

「……柏崎さん」

「……なんだ？」

「あの建物に入った瞬間、なんか、変な感じがしたんですよ」

「奇遇きぐうだな。私もだ」

人体が放つ死臭の他に、つんとした黴臭かびくささを感じた。それが今も、自分にまとわりついている気がする。

「なんだか、僕の部屋みたいだったんです。怪異があった時の……」

榊は、かつて怪現象に見舞われていた自分の部屋のことを思い出す。あの時も、同じように黴臭さが漂っていたのだ。

もつとも、榊自身はすっかり怪異に吞まれていて、ある男に指摘されるまで気付かなかったのだが。

その男の名刺を、柏崎は名刺入れから取り出す。それは、榊が報告の際に渡したものだだった。

「今日はもう、家で休め。そして、明日、この人物に連絡しろ」

柏崎は、名刺を榊に返す。榊は渡した時のままのそれを受け取った。

「柏崎さん、これ……」

「そろそろウチも、専門家の介入が必要な気がしてきたからな」

柏崎いわく、以前から、マヨイガが扱っている物件で妙なことが起こるといふ話があったという。だが、ここ最近、それが顕著けんちやくになっっているというのだ。

「妙なことって、僕が遭ったみたいなの……」

「今まで報告があったのは、そこまで大胆な怪異じゃない。だが、君の実例を見ると、今回のこともしかしたら、と思っただけ……」

怪異で亡くなるなんて、小説や映画の出来事のようにだ。

普段ならば、そんなまさかと思うのだが、実際に体験してしまうと、簡単に否定出来なくなる。

「そもそも、マヨイガという社名自体、怪異じみたものだしな」

「そうなんですか？」

「ああ。やなぎだくにお柳田國男の『遠野物語』に登場する怪異だよ」

『遠野物語』とは、柳田國男という民俗学者が、岩手県の遠野に伝わる話をまとめたものである。

それに、『迷い家』という怪異について書かれているのだ。

人里離れた山中にポツンと建っている無人の家で、訪れた者を盛大にもてなしてくれるという。そして訪れた者は何か一品持ち出していいことになっているのだが、無欲な者が持ち出した物品には、大きな恩恵が宿るというのだ。

地元の人は、それを『マヨイガ』と呼んでいた。

「いい話じゃないですか」

「まあ、悪い話じゃない。実際、創業者は『迷い家』のようにお客さんをもてなし、素晴らしい物件を提供したいと思っていたようだし」

「そう言えば、会社のホームページに書かれていたような気がする……」

漠然と、いい話だなーと読んでいたことを榊は思い出した。それと同時に、ホームページを見た時の違和感も呼び起こされる。

「あれ？ でも、社長と創業者の名前が違っていたような……。代替わりしたんですか？ ウチって創業してから、それほど経っていない気がするんですけど……」

首を傾げる榊に、柏崎は静かに告げた。

「創業者は、亡くなったんだ」

「えっ」

「正確には、行方不明になってかなりの年月が過ぎ、死亡扱いになったというところだな。噂では、創業者はオカルトに傾倒していたらしい」

榊は息を呑み、車内には沈黙が漂う。ただよ

そんな中、車内のパネルから流されるオフィスソフトのCMが、やたらと場違いに感じたのであった。

「——というわけです」

市ヶ谷の一角にある喫茶店にて、榊は一通りの説明を終えた。

目の前にいる黒ずくめの青年は、怪異に見舞われていた榊を助けてくれた人物、九重このえだった。

彼と会った時は、薄暗い路上であつたり、慌ただしい状況だったりして、まじまじと姿を見ていなかった。

彼の気配は、夜の中だとやけに希薄で、意識しなくては認識の外こぼに零れてしまいうでもあつた。

だが、昼間の明るい店内では、彼の存在は浮いていた。

何せ、髪やコートや靴に至るまで、全身黒ずくめなのだ。肌が色白なのも相俟あいまって、墨絵で描かれたようだと榊は思った。

美しい顔立ちなのだが、どこか物憂げで、眉をわずかにひそめて苦悩しているようにも見えた。

ふと、本当に人間なのかという疑念が過ぎる。九重の纏う雰囲気は、それほど異質だった。

影のようにひっそりとしていて、何処にでもいて何処にもいないように思えた。

黒い革手袋を嵌めた彼は、温かいココアに口をつけながら、榊の話に耳を傾けていた。

九重の整った唇がカップに触れる度に、榊は何やら落ち着かない気持ちになる。自分が女子であれば、悩ましい溜息の一つでも零していたかもしれない。

ココアを飲んで一息ついた九重は、静かに言った。

「警察が介入しているのなら、俺の領分ではない。彼らの邪魔をするわけにはいかないからな」

「おお、そう来ましたか……。でも、警察の捜査にも限界があると思うんですよ。その、普通の事件ではないみたいだし。弊社としては、とにかく件の物件に怪異がまとわりついていないか知りたいんですけど……。まとわりついていたら、除霊もお願いしたいし……」

事故物件となってしまったが、物件自体が貸せなくなってしまうわけではない。オーナーの意向で、警察の捜査が終わって然るべき処置をした後は、再び入居者を探さなくてはいけなかった。

その際、警察や不動産屋にとって専門外な問題を取り除いておきたいというのが会社の意向だった。

そして、亡くなった落合の下半身が見つかれば、警察の捜査が早く終わるのではという目論見もくろみもあった。

「君の家の様子と、似ていたと言ったな」

「そうですね……。あの黴臭かびくささとか、この辺がぎゅっと摘ままれる感じが似ているような気がして……」

榊は、額の皮をきゅっと摘まんでみせた。

「でも、妙に綺麗な気もするんですね。僕の家は黒ずみがヤバかったですけど、あの店は血痕けっこんすらなかったし……」

昨日の出来事を思い出した榊は、「うっ」と思わず口を押さえた。飲んでいたコーヒーを戻しそうになってしまったのだ。

死体を見るのは初めてじゃない。祖父が亡くなった時、棺ひつぎに入れられた遺体に花を供えたことがある。

だが、祖父は生前と同じ姿で眠るように目をつぶっていた。落合のように、身体が半分なくなって目を見開いていたわけじゃない。

「妙に綺麗……。か。場所を、教えてくれないか」

「九重さん、調査を請ける気になってくれたんですね！」

戻しそうになったコーヒーを飲み込み、榊は目を輝かせた。

「……そうだな。個人的に、気になることがある」

榊は、柏崎から提示された報酬やら何やらの話をし始める。

だがその時、ふと、前回のことが気になった。

「そう言えば、僕は前回助けてもらったのに、お支払いも何もして
いなかったんですけど……」

榊は震える声で、「お代はいかほどで……」と尋ねる。

九重が強制的にしたことだが助けてもらったので、支払える範囲
であれば出し惜しみをしたくない。とはいえ、それほど金銭的に余
裕があるわけでもないが。

「あの時は、俺がやりたいと思ってやっただけだ。不法侵入で通報
しなかったから、それでいい」

心配する榊に対して、九重はあまりにもさらりと言った。

「えっ、除霊ボランティアとか、九重さんは仏様か何かですか？」

「いや、呪術屋だ」

九重は、顔色一つ変えずにココアを啜る。

「気になってたんですけど、その呪術屋ってなんですか？ やって
いたことは霊能者っぽかったんですけど……」

思わず除霊と言ってしまったが、九重は呪いが云々うんぬんと言っていた。

専門知識がない榊は、九重が榊の部屋にあった呪われた道具を壊
し、家の周りにやって来た幽霊を退けたようにしか見えなかったが。

「君が霊と表現しているものも、呪いの一種だ」

「ほほう？」

九重の補足に、榊は首を傾げる。

「そして、呪術屋という誤解を受けるかもしれないが、実際は、『呪い屋』^{のろ}といったところだろうな」

「寧ろ、^{むし}そっちの方がわからないんですけど……」

呪いというと、やはり丑^{うし}の刻参りを連想してしまう。

「丑の刻参りもまた、呪いの一種だな。君の認識は誤りではないが、あまりにも狭すぎる。呪いというのは、もっと日常に潜んでいるものだ」

「日常に……？ 怖過ぎでは？」

榊はぶるつと震える。

だが、榊の認知バイアスを呪いだと言っていると九重は言っていた。それならば、日常的にあるものだ。

「日常的な呪いとは、存在を縛るものだ。君の榊誠人^{まこと}という名も、君を縛る呪いの一種だ」

九重は、榊から渡された名刺を眺めながら言った。

「呪いはネガティブなイメージが強いが、そういうわけではない。君に榊誠人という名前を付けることにより、榊家の誠人という人物であると周囲に認識させることが出来る。君に名前がなかったら、どうなると思う？」

「何処の誰だかわからないって感じですね……」

名前は大事なものだ。

名前がなければ住居も借りられないし、就職も出来ないし、資格

も取れない。その人を呼ぶときだって、名前がないと不便だ。

「名前という呪いは日常に欠かせないものとなっている。そういう意味では利点の方が大きい。君は紳誠人だからこそ、紳家のしがらみに縛られることもある」

「名前があつて身分がしっかりしているからこそ、税金も払わなきゃいけないですしね……」

「税金は巡り巡って、自分の暮らしを良くするものだ。デメリットにはならない」

呪いという、一見すると非科学的な話をした男は、非常に現実的な社会の仕組みを紳に論じた。

「他にも、役目も呪いの一つだ。君は新入社員という呪いに縛られているからこそ、会社で守られているが教育を受けなくてはいけない」

「上司の柏崎さんは、課長だから僕の教育をしなきゃいけないし、辞めていった同僚の分まで仕事をしなきゃいけない……」

そう考えると、柏崎はとんでもない呪いにかかっていると言える。彼女が仕事を投げ出して退職すれば、彼女にかかった呪いが解けるかもしれないが、性格的に絶対にやらないだろう。

「呪いって、あらゆる縛りをそう表現しているという感じですか？どっちかというところ、呪いをかけることで自他にそういう認識をさせるって感じなのかな……」

「君は理解が早い」

九重は淡々とした表情のまま、さらりと袖を褒めた。袖はデレつと表情を緩めるが、九重は間髪を容れずに続けた。

「誰かを呪うということは、誰かへ強制的に縛りを科すということだ。君が言う丑の刻参りは、痕跡を残して呪う対象に見せれば、呪う対象に『誰かが自分に害意を抱いている』という認識をさせることが出来る。逆に、痕跡を残さないのであれば、『自分が憎い相手を呪うことで不幸に陥おちいらせることが出来るかもしれない』という認識を得ることも出来る」

「ということは、前回の僕も……?」

部屋中の汚れと怪異を認識出来なかったのも、袖自身が「そんなことはあるわけがない」と拒絶するよう、自身に縛りを科していたからではないだろうか。

そのことを九重に話すと、「そうだな」と頷いた。

「それもまた、自身にかけた呪いだ。呪いをかける技術を呪術と呼ぶ。そして、俺はそういうものを、解いて回っている」

「僕は知らぬ間に呪術を……」

ちよつとだけ、カッコイイのではと思ってしまう。だが、九重は無表情で、冷やかな反応だった。

「一般人が知らない間に呪いをかけるのは、よくあることだ」

「ですよね……」

九重の話では、よくある思い込みも呪術の一つだ。それを再認識して、榊はがつくりと項垂れた。

「ん、待てよ」

「……どうした？」

「九重さんは、どんな呪いでも解いちゃうんですか？」

「そうだな」

「それじゃあ、人から名前を奪うなんてことも、出来るんですかね……？」

興味本位の疑問だった。そんなこと、出来るわけがないと思った上での質問だった。

だが、九重はカップを手にしたまま固まり、アンニュイな瞳で答えた。

ただ短く、「ああ」と。

榊は柏崎に連絡をしてから、九重とともに上野に向かう。

名前の話をしてから、もともと無口だった九重は、更に沈黙ばかりになった。

人の名前を奪えるなんて、本当だろうか。そんなはずはないと思うものの、九重が嘘を言っているとも思えなかった。

名前を奪われてしまったら、どうなるんだろう。

榊が榊誠人として認識されなくなってしまうたら？

身分証明書は使えなくなるし、マヨイガの社員としても働けなくなってしまうのではないだろうか。そして、柏崎にも名前を呼ばれることはなく、名無しの人として、空気のような存在になってしまうのではないだろうか。

そう考えると、恐ろしい。

榊は自然と、九重と距離を取りながら歩いていた。そんな榊を、九重は気にした様子はなかった。

やがて、上野にある例の店の近くにたどり着く。

店のシャッターは開けられ、中と外には数人の警官がいた。現場検証をしているらしく、鑑識が出入り口付近を捜査している。

「昨日の今日だし、当たり前か……」

建物の陰から店の様子を眺めながら、榊は溜息を吐いた。

「あの、上司がこちらに来るそうなので、しばらく待ちましょう。やり手の上司なので、警察とうまく話をつけてくれるかもしれませんし……」

榊は九重の方を振り返るが、彼の姿はなかった。

「九重さん？」

なんと、榊の提案など他所よそに、九重は現場の店に歩いていくではないか。

「待ってください、九重さん！」

榊は慌てて、九重の後を追う。そんな二人を、店の前にいた警官

が見逃すわけがなかった。

「なんだ、君達は？　ここは立ち入り禁止だよ」

外で見張っていた警官が、二人を押し戻そうとする。榊は「関係者です！」と事情を話そうとする。

だが、それより早く、九重が動いた。

「すまないな」

ぼつりと眩き、前方に右手を差し出す。店に踏み込む寸前で、虚空をむんずと掴んだ。

「急急如律令。暗幕よ、解けよ」

九重が空間を引つ張ると、何かがずるりと引き剥がされた。

「うわっ……！！」

九重は驚く榊の腕をむんずと掴み、遠慮なく店の中に入る。警官に強制退去させられると思っただが、その気配はなかった。

それどころか、こちらを止めようとした警官の姿が消えていた。しゃがみ込んでいた鑑識の姿もない。

「っていうか、ここ……何処ですか……？」

榊の声が震える。店内は、昨日とは様子が異なっていた。

少し黄ばんだクリーム色の壁は、どす黒い汚れがこびりついている。赤みを帯びたそれは、渴いた血にも見えた。

鼻がもげるほどの黴臭さが漂っている。

照明がついてなくて暗いのに、何故か、店内の様子はぼんやりと

見えた。

「あの店の中だが、異界だ」

「異界？」

榊は、オウム返しに尋ねることしかできなかった。

「認識がずれた異空間だと思えばいい。歪みにして、強力な呪いだ」
「異空間って、にわかには信じられないんですけど……」

だが、信じるほかない。さつき自分達を止めようとした警官は、
いまや、影も形もないのだから。

背後を振り返ると外の様子が窺えたが、陽炎かげろふのように揺らめいて、
ひどく平面で現実味がないものに見えた。

また、自分は真実が見えていないのではないかと己を疑いそうになる。
だが、今は見たままを受け入れ、九重を信じるしかないと思
った。

自然と、九重のコートを掴んでしまう。だが、九重は振り払おう
とはせず、店の奥へと向かった。

店内には棚がずらりと並べられ、輸入雑貨が陳列ちんれつされている。

だが、どれも真っ黒に染まっていた。見たくないものであるかの
ように、塗り潰されていた。

「元々は、輸入雑貨が好きだったんだろうな……」

だからこそ、店を経営しようと思ったのだ。だが、利益が得られ
なくて、焦れば焦るほど、その原因となる商品に憎悪が向いたのだ

ろう。

そう思うと切なくなる。榊は、自然とうつぶいた。

しかし、立ち止まった九重の背中に、そのせいで顔を突っ込むことになった。

「ぶわっ、すいません！」

榊は慌てて飛び退く。

だが、九重は目の前にある机を見つめているだけだった。

「あっ、そこは……」

「被害者の遺体があっただらう？」

「どうしてそれを？」

説明したつけ、と首を傾げる。

九重は真っ黒に汚れている机の上をそっと撫でて、こう言った。

「呪いの痕跡がある」

「そういうのも、見えるんですか……？」

「追っている呪いがあるからな」

答えになっているのかなっていないのかという返答の後、九重は膝を折って机の下を探る。

そこには、開放されたままの空っぽの床下収納があった。

「ここには何が？」

「えっと、僕達が来た時には、何もありませんでした」

「……そんなはずはない」

そうは申されましても、と榊は心の中で抗議する。

しかし、九重はそれ以上、榊を問い詰めたりせず、机のすぐ横にあったサイドテーブルに視線をやった。

「この写真立てだけ、汚れがないな」

「あつ、本当だ」

サイドテーブルには、写真立てが置かれていた。

そこには、笑顔の落合と、同じくらいの年齢の女性、そして、若い女の子が写っていた。

落合は絶望的な死に顔から想像出来ないほど、幸せそうに微笑んでいた。

「家族の写真だ……。ここに入居していた落合さん、奥さんと娘さんがいるみたいなんですよね」

「家族がいるからこそ、経営が傾いた時に思い詰めていたのかもしれないな」

「そういうのも、呪いが発生するんですか？」

夫として、父親として、経営者として、そんな呪いに縛られているそうだ。

「そうだな。様々な立場がある者は、それだけ呪いに雁字搦がんにがらめにされやすい」

「色んな立場にいると身動きが取れなくなる、って上司が言っていたんです。そういうことかなって思ってた……」

そう考えると、柏崎のことも心配だ。とはいえ、自分も柏崎を縛っている呪いの一つなのかもしれないが。

「九重さん、僕——」

「しっ」

九重に人差し指を向けられ、榊は慌てて口を噤んだ。

ひたっと裸足のほだしのような足音がする。九重に促され、榊は膝を折って姿勢を低くした。

うすぼんやりとした闇の中で、何かがゆっくりとこちらに近づいて来た。

歩き方とおおよそのシルエットから、人のように見える。

だが、近づいてきた『それ』の姿が明らかになった瞬間、榊は悲鳴をあげそうになった。

裸足でやって来た存在の下半身は、中年男性のようだった。どつしりとした足に、汚れたジーンズがやけに目につく。

だが、上半身は違っていた。

肉と脂肪を無理矢理膨らませたような、ぶよぶよとした塊だった。深海魚がいきなり水上に引き上げられた時、内臓が口から飛び出したり、身体が不自然に膨らんだりする。そんな姿に、よく似ていた。

肉の塊からは、バオバブの木みたいに膨らんだ腕のようなものが飛び出していて、三本しかない指で、辛かろうじて段ボール箱を持っている。

化け物だ、と榊は叫びそうになる。

だが、奇妙な塊はひたひたと二人の前を横切り、店の陳列棚までやって来た。

「探したものは、見つかったようだな」

九重が、ポツリと言う。

そんな彼の前で、奇妙な塊は段ボール箱から輸入雑貨を取り出し、空いている棚へ丁寧に陳列し始めたではないか。

「まさか、落合さん……？」

奇妙な塊の下半身の体型やファッションは、仰向けになっていた落合の上半身と一致するように思えた。

下半身から無理矢理生えた上半身のようなのは、必死に箱の中の雑貨を手にしようとしますが、いかんせん不器用なようで、ポロリポロリとこぼしてしまう。

どういうわけか、現世から消失した下半身は、この異界とやらで仕事を続けていたようだ。こんな場所では、客が来ないというのに。

落合の下半身は、手のようなもので落ちた雑貨をなんとか拾い上げ、埃ほこりを払って棚へ均等に陳列していく。

だが、陳列したそばから、雑貨は腐敗ふはいでもしたかのように黒ずんでしまうのだ。

「お、落合さん！」

居ても立っても居られず、榊は立ち上がった。

異形の落合への恐怖は、心の中から消え去っていた。

「もういいでしょう！」 あなたは、亡くなったんですよ！ それに、どんなにお店を整えたって、もう、誰も来ないじゃないですか！」
不毛な作業をやめさせたい。

そんな一心で、榊は落合に呼びかけた。だが、落合は聞いている様子もなく、黙々と作業を続けていた。

「……榊」

見かねたのか、九重が榊の肩を掴む。だが、榊の叫びは止まらなかった。

「戻って来てくださいよ！ ご遺体はちゃんと家族にお返しします！ 不動産のことだって、いや、それ以外のことだって、僕がお手伝いしますから！」

家族。その言葉に、落合の下半身は動きを止めた。

緩慢に、しかし確実に、榊と向き合おうとする。

「落合さん……」

だが、その瞬間を待っていたかのように、九重が動いた。

「すまないな」

九重は、落合の下半身から生えている肉塊をむんずと掴んだ。

「なにを……!!」

驚く榊の前で、九重は静かに唱えた。

「急急如律令。我が呪いにより……解けよ」

びくん、と落合の下半身がのけぞる。だが、彼が動いたのはそれが最後だった。

急速に、九重に掴まれている肉塊の輪郭りんかくが崩れる。

ボロボロとこぼれた肉片は、細かく崩れるたびに色を喪って、最後にはガラスの欠片のように透明になって、虚空こくうへと消えて行った。さあっと店の奥から風がやってくる。

それは辺りに漂う淀んだ空気をさらい、店の外へと運んで行った。その風に乗って、優しくも悲しげな中年男性の声が聞こえる。

「……あとは頼んだよ」

「えっ？」

榊は振り返るが、そこには、落合が使っていた机があるだけだった。

「やはり、な」

一方、肉塊を消し去った九重の手には、見覚えがある板切れが握られていた。榊の家に隠されていたものと、瓜うりふた二つだった。

「こいつが、被害者を動かしていたんだろう」

九重の手の中で、人型の板切れは真っ二つに折れる。乾いた音とともに、板切れが持っていた得体の知れない雰囲気も消失した。

「どうして、それが……」

「俺は、これを追って来た」

「九重さんは、あれが何か知っているんですか？」

食い下がる榊であったが、九重の足元でどざりと重々しい音がした。

榊は、恐る恐るその正体を見やる。

そこには、肉塊から解放された落合の下半身があった。九重はその遺体に、刹那せつなの黙禱もくとうを捧げる。

「行くぞ。異界が消える」

周囲の景色が揺らぐ。「今、ここに人が来たような」「気のせいじゃないか」という警官達の声が聞こえる気がする。

このままではいけない。榊はそう思って、コートを翻ひるがえして踵かかとを返す九重に続いて店から出た。

もちろん、落合の机の横にあった、家族の写真を回収することを忘れなかった。

落合の下半身は、警官達の目の前に突如出現した。

その場が騒然とする中、彼らの目を逃れて脱出した九重と榊は、店を後にした。

柏崎も駆けつけたが、立ち去る九重とすれ違いになってしまった。そのせいで、榊は柏崎への説明に難儀なんぎした。なにせ、わからないことばかりである。

落合の下半身は異界にあって、そこで落合が死しても尚働いていたので、何とか説得して下半身を引き戻した。落合の下半身から生

えていたものは、九重が取り除いてくれた。

榊は自分でも、その説明がサッパリわからなかった。

榊も眉間みけんを揉みながら聞いていて、最終的には、「わかった、わかった。わからんけど」と話を強制終了した。

上や外への報告は、全部、彼女がやるとのことだった。申し訳ないと思いつながらも、それが最良の手段だろうな、と榊は思った。彼女は自分と違って、大人の対応が出来るはずだ。

そして、写真立てをご遺族に渡したい、という榊の願いは、柏崎が同行するということで聞き入れられたのであった。

後日、柏崎とともに遺族への挨拶に伺った。

葬式は終わった後のようで、妻は憔悴しょうすいしきった様子で応対してくれた。彼女らは古い集合住宅に住んでいて、落合のお骨と遺影はリビングに置かれていた。

柏崎は、落合の妻に丁寧に説明しながら、不動産関係の書類を渡す。落合の妻いわく、落合は借金を背負っていたが、生命保険で何とか返せるとのことだった。

「お金が入ってきてても、あの人が帰ってこなければ意味がないんですけどね……」

落合の妻は、寂しそうに笑った。彼女は柏崎から書類を受け取る
と、「お世話になりました」と丁寧に頭を下げる。

榊は思う。

家族を大切にする落合は、自責のあまり、事故に見せかけた自殺でも凶ろうと思ったのではないだろうか。そうした方がいいという呪いを、自身にかけたのではないだろうか。

人型の板切れは、社員寮に居続けたいという榊の認知を歪ませていた。もしかしたら、願望から生まれた呪いを、増幅させる力があるのではないだろうか。

落合は、家族に迷惑をかけないために死を選んだ。だが、自分の店も捨てられなかった。

だからこそ、身体の半分は異界とやらで仕事を続けていたのかも
しれない。

(やるせないな……)

どうして、こんなことになってしまったのか。榊は、感情のやり場を見つけれなかった。

するとその時、「ただいま」という女兒の声とともに、玄関の扉が開く音がした。

「あ、すいません。娘が帰ってきたようで……」

「お母さん、お客さん？」

ランドセルを背負った娘は、遠慮がちに顔を覗かせる。「ごめんね。取り込み中で」と落合の妻が娘を引っ込ませようとするが、それよりも早く、榊が歩み寄った。

「これ、お父さんから預かったんだけど」

紙袋の中から、写真立てをそつと取り出す。

きよとんとしていた娘であったが、笑顔の家族写真を見た瞬間、ぱつと破顔はがんした。

「お父さん！」

娘は、ぎゅつと抱きしめる。

写真を見た落合の妻は、目を丸くしていた。

「あの写真、いつの間にかアルバムから消えたと思ってたんだけど、あの人が持っていたのね……」

「……どんな時でも家族が見守っていると、心の支えにしていたのかもしれないね」と、様子を見守っていた柏崎が言った。

娘は、写真立てを強く抱きしめていた。今度こそ、家族を手放さないと言わんばかりに。

「お父さんはきつと、そこから君達を見守っているよ」

榊は膝を折って娘の目線に合わせると、慈しみいづくを込めてそう言った。すると、娘は力強く、「うん！」と頷いた。

父親が見守っていると思ひ込ませることも、九重の言う呪いの一つなのかもしれない。

でも、それでご遺族が救われるのならばいいじゃないかと榊は思う。願わくは、呪いなんかじゃなくて、本当に見守っていて欲しいけど。

愛娘に抱きしめられた写真の中の落合は、明るく、何処か安らかに微笑んでいるように見えた。

(つづく)